

明治四十年四月一日創刊 令和二年十月一日 通巻第一、三六四号 (毎月一回発行)

和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会
会長 吉田源彦

北海道神宮献詠 十月兼題 「解く」

長く長く奥歯削られをりたるよ世のしがらみより解かれざるに似て

朝の身に帯締めをれば締めよく夕べに解けばホッと休まる

神無月「解く」と「命ず」の悲喜ひとつおち葉もみぢ葉時をしつらふ

丁寧ていねいにコーヒーを淹るるひと時よ「母」「妻」「仕事」の任を解きたる

解き難き教への道の難題も楽しみつつ臨む耳順を過ぎて

宇宙そらの謎持つとふコスモスの花芯覗くいのちの不思議解けるかしらと

的てき中の音の名残も消え去りて残心解けば鼓動の響く(高校時代弓道大会にて)

数学の難問を解く自己流の猛暑対策十代のころ

彼岸すぎて仕舞ひ忘れたる風鈴に寝入るわが子の髪解かしやりぬ

主婦の仕事解かれて夫の一周忌よ二十四時間自由となりぬ

結び目を解くかのやうに人の世も易しくあれと思ふ日もあり

いにしへの邪馬臺国の謎を解き卑弥呼の眠る地を参りたし

村田俊秋先生選

選者 村田俊秋

会長 吉田源彦

副会長 角田秀昭

天位 南貴子

地位 信田日裕

人位 後藤紀美子

秀逸 片石辰弥

秀逸 原里子

秀逸 遠田信之

佳調 室岡和子

佳調 宮城涼

佳調 後藤優美子

着物を解き洗ひ張りした若い時大阪での暮し懐かしく思ふ

日本は省エネの技術CO₂ゼロへ解明成功水素戦略

静けくも君なきを思ふ心解かれ秋の日脚に秋桜のあふる

困り果て子の指先を見つめをるマナーモードの解除法かな

日本史の答案用紙覗き見て吾子の解きたる田沼意次

「あたりくじ」喜ぶ子のため優しき母解けぬ様にと手を添へ結びぬ（みくじ掛けにて）

鈍行でどこまで行くのか青春よ「かわいい子には」と門限を解く（青春18切符）

解けぬまま放置されたる問題集改めて見るも解ける気はせぬ（高校数学）

モンゴルの草原の空思ひ浮かべ青の色こき染料を溶く

早々にコロナの呪縛解き放ち学びたることに感謝し前へと

コロナ禍の神の意に沿ふ人びとの努力の伝はり解かるるを願ふ

コロナ禍はいつ収まるや春夏過ぎ問ひの解けぬまま秋を迎ふる

マスク解き密をさけつつ夜歩く無意識のうち深く息吸ふ

ひさびさに着物を着れど三回も帯解き直すに首の辺の痛し

萩の揺れ月みるやうにながむれば解き放たるるあまねく想ひ

雨予報東神楽の野宮場に雲流れきて急ぎ荷を解く（ボイスカウトの訓練）

加藤 紀恵子

八尾師 絹子

石川 弘子

小川 紫織

楽間 直之

吉良 忠誠

須田 真矢

岩間 亜有加

新谷 英子

大瀧 廣子

鎌田 憲子

梶谷 久寿美

中島 正倫

織田 幸子

大桃 小やゑ

今井 建

総評

天位（南 貴子）

女性の自分の時間を探つての作。主張が分かる。作者が見える。いろいろの立場から解放されてのコーヒータム。これを「丁寧」にコーヒートを淹るるひと時よ」と、この「時」をゆつくり味わっている。

地位（信田 日裕）

長く教職に携わってきたのだ。そして今、六十歳を過ぎたのだ。しかし、教育への思いは強く、教壇に立っているのだ。苦しいこともあるが、それすら「楽しみつ」なのである。天職と思っているのだ。「耳順ふ」も大切だが、様々への厳しい姿勢を保つ作者なのである。

人位（後藤紀美子）

コスモスは花である。そして秩序と調和をもつ宇宙や世界の意でもある。この両方の意を用いての広がり、深さを持つ作。目になっているコスモスの花の蕊。雄蕊、雌蕊がそこに共にあることから「いのちの不思議解けるかしら」の思いが生じる。観察と思索の結びついた作。一首にカオスはない。

秀逸（片石 辰弥）

矢を放つ。的中。その音。その音が矢を放った後の静かな構えの作者の耳と心に届くのである。届くのは静寂という心の構えがあるから。そして鼓動を知るのである。極めて短い時間の緊張、充実とを伝える。

秀逸（原 里子）

どう考えるか。十代のころ、数学の難問を解くのに自己流で取り組んだのだ。そして猛暑に対するのもその自己流でやったというのだ。何事も自己流で乗りきってきたのだろう。世に対する確かな目も持っているのだ。

秀逸（遠田 信之）

とにかくかわいなのだ。静かに寝入った子。一歳に満たないと聞いている。何に寝入ったのか。風鈴の音にである。彼岸すぎとある。暑さが残っている。窓からの小さな風に鳴っているのだ。そしてである。少し絡まっている子の髪を解かしているのだ。優しい手である。

佳調（室岡 和子）

夫を亡くして一年。寂しさは続いている。長い間、妻として側にいたのだ。病床の夫の介護にも専念した。考えてみる、自分の時間が余りなかったかなと思う。今、丸ごと一日、自分の時間。「自由となりぬ」とあるが、それを寂しさが伴っているのである。

佳調（宮城 涼）

人と人とのつながり。これは難しいものだ。つながるのだけではない。時間を共にするような人との、事情あつての離れ。結び目を解く難しさに似ているという。その解き方、離れの難しさの主張に共感できる。

佳調（後藤優美子）

邪馬台国は魏志倭人伝によって伝えられている。卑弥呼の統治していた国と言う。所在地は九州説と畿内の大和説とがある。さて、どちらの地を訪れたのか。それを教えてほしかった。歴史への関心の深さ、学習意欲の強さ。ここからの一首。

札幌興風会 十月兼題(一) 「枝」

村田俊秋先生選

羊蹄の裾野の道の枝も葉も伸びやかにして活き活きと見ゆ

天位 原 里子

評 羊蹄山の裾野で目にした「枝も葉も」が主人公。下の句の把握が魅力的。中々、こうは表現できない。これを可能にしたのは、勿論、羊蹄山の麓の広がりという場の設定があるが、これを越える作者の広い詩心があるからと言える。

細枝はチップとなして太枝は輪切りに敷き込み樹の路つくれり(神宮茶屋の裏道に敷きこむ) 地位 角 田 秀 昭

評 神宮境内の伐採された木による「樹の路」を詠む。小枝はチップに、太い幹は輪切りにされて使われているのである。視覚的にも感触的にもやわらかい「樹の路」が読者の目の前にも伸びている。丹念に詠んでいる。

十年前店の引戸に小枝つけし粹な大工さん再会嬉し 人位 大 湯 廣 子

評 作者は十年前に飲食の店を開いている。その時、店の引戸に「小枝」をつけてくれた大工さんに会ったのだ。「粹な大工さん」と述べるが、開店を祝つての小枝であったのだ。その時のうれしさが、湧き出てきての一首である。伸びに伸びる木蓮の枝剪らむとしあまたの蕾に鋏はさまをためらふ(来春の為の蕾が既にありて) 秀逸 遠 田 信 之

整へて生かさむとして紅葉木を枝打ちする地に稚枝の積む 秀逸 後 藤 紀美子

木の枝に作れる花かごを吊るせるに沙羅のおもむき増すと見えたり 秀逸 織 田 幸 子

奥深い茶の湯の道に励む友御点前の技美しきかな 佳調 石 川 弘 子

紫陽花は二年めの枝に花を持つと冬囲ひ前の剪定をする 佳調 室 岡 和 子

手入れせぬ藤棚の枝絡み合ひ空へと伸びるは自助か共助か 佳調 梶 谷 久寿美

夏椿三年たちて枝かげに花芽ふくらむ数へ切れなく 新 谷 英 子

三歳はイチイの枝をしかと握るモミジのやうな小さなその手に(七五三詣) 片 石 辰 弥

枝上で松ぼつくりの皮飛ばす小りすの囃じりは機械のごとき

久々の実家の庭を歩くなり広がり生ふる独活の枝よけ

艶光るウルシの小枝振り回し惨事招きけり悪童の九月

枝葉より季ときを知りてのつとめをと夏は涼しさ冬は陽ざしを

窓越しにふと目に入る木々の枝風に揺らいで季節を告ぐる

連休はさくらんぼ狩りに豊滝へ目印看板はさくらんぼ一枝

若苗のマルメロの枝に蜻蛉らはかをる実まだかと首を傾げる

娘が育てしミニ盆栽のもみぢの木枝いつぱいの紅葉に感激

雨あがり枝葉に隠れたるむくどりに落ちる滴に目を奪はれぬ

枝先に生る実は今年はひとつだけ梨の木よ我に見せむとしてか

大桃 小やゑ

岩間 亜有加

信田 日裕

鎌田 憲子

宮城 涼

八尾師 絹子

須田 真矢

加藤 紀恵子

小川 紫織

南 貴子

札幌興風会 十月兼題(二) 「屋根」

村田俊秋先生選

屋根のごときこの大波に海に入るあるがままに全てをまかせる (令和二年八月石狩浜での襖) 天位 大 鴻 廣 子

評 石狩浜での襖の歌。襖を長年続けている作者。海に、波に真向かっている姿が見える。寄せてくる波が「屋根のごとき」と述べる。大波なのだ。そこへ入ってゆく。「あるがままに全てをまかせる」ことが出来るのは、胆力がすわっているからだ。心身共に強い作者の一首。

屋根裏はお伽とぎの国よ木馬、アルバム沓とほき日のわれまぼろしに遊ぶ

地位 後 藤 紀美子

評 屋根裏を使つての子供部屋。そこを「お伽の国」と呼んでいる。木馬があり、子供の頃を記録してのアルバム。これらは作者の心の中にある幼少期の思い出なのだ。その幻のような遠い日に、今、遊んでいるのだ。詩情ゆたかな作。

秋の夜の雨に思ひぬ昼間見た屋根なきベンチで寝てゐたる人を

人位 大桃 小やゑ

評 昼間に見た人、それはベンチで寝ていたのだ。もしかしたらホームレスのような人ではなかったかと考える。今は夜。雨が降っている。冷たい秋雨だ。やはり、ベンチの人に思いがいく。人間愛の深い作。

透析の夫が物置の屋根とはいへペンキ塗る姿ドキドキの我

秀逸 加藤 紀恵子

お向ひも隣も新築完成の屋根にソーラーパネルの光る

秀逸 梶谷 久寿美

三十年ぶりに同級生に会ふ赤屋根玉ねぎ塔の絆で

秀逸 南 貴子

朝もやの小道をゆくに光射す屋根に見えたり木々の重なり

佳調 小川 紫織

朝露に濡れたる社の屋根に映る朝日子眩しく日供ひつぐにむかふ(宿直明けの朝に)

佳調 遠田 信之

無落雪住宅ゆゑに屋根のほり中央溝路の落葉をのぞかむ

佳調 角田 秀昭

秋雨に屋根から滴る不規則な水のリズムに合はせ指打つ

片石 辰弥

屋根を打つ雨音聞けぬアパートは暮らし易くも自然を欠いて

宮城 涼

慣れつつも片流れ屋根の落雪は帰省のたびについ身構ふる(実家にて)

須田 真矢

秋の虫鳴く音も静かなるワラビキの屋根までツタの生えゐる古民家

石川 弘子

テレビには「ぽつんと一軒家」は大自然寂しさよりも快適暮らし

八尾師 絹子

小雀が屋根に集ひて囀ればあまたにぎはふバードテーブル

室岡 和子

故郷の屋根雪下ろしは父指導弟と共におろしつつ

原 里子

雪害にいためる屋根を修復す水もれもなくホツとしてゐる

新谷 英子

檜皮ひはだにて葺き替へ終へたる清水の新しき屋根錦雲溪に映ゆ(京都清水寺平成令和の大修理)

信田 日裕

降り積もる雪が屋根を滑りゆきどどうと落ちる冬の茶飯事(網走)

岩間 亜有加

札幌興風会 十月兼題(三) 「雑詠」

村田俊秋先生選

大根は行きつ戻りつすられるてつべこべつべこべと言うてをるなり

シヤラシヤラと柿ピーを皿に盛り上げて競ひて食ふる山崩しのやうに

我が庭に初の胡瓜の実りたり味噌つけ食べよと自慢げに妻は

心臓を患ふ父の左足血管移植の傷痛痛し

どんと在る羊蹄やまの日の出と雲海を無言のうちに夫と見てをり

一眼レフ写すは車窓か青春か首にぶら下げ息子は旅立つ(青春18切符)

ステイホームで病の咳もをさまりぬ次の歌会は出席せむよ

コロナ禍に僧侶もマスクの読経なり夫の一周忌無事に終はれる

家族らとブルベリー狩りよ大粒の甘く熟れたるは目にも優しく

我が庭の秋明菊の咲き盛り真昼の空に鱗雲浮く

「オスマイト」の三とせの過ぎて我が処置を「卒業」とドクター重荷の一つが

神無月一匹で鳴く蟋蟀に吾が子とともに眠りにつきぬ

習ひたての歌を唄ひて踊りゐるをさな児愛し敬老の日よ

幾年いくとせもいにしへの技色のあせず刻を計らず刻に委ねて

早朝に額に受くる陽の熱し輝く洞爺湖に祝詞のひびく

長月は夏の名残に捕らはれて心決めかね行きつ戻りつ

天位 大桃 小やゑ

地位 南 貴子

人位 角田 秀昭

秀逸 岩間 亜有加

秀逸 原 里子

秀逸 須田 真矢

佳調 新谷 英子

佳調 室岡 和子

佳調 八尾師 絹子

石川 弘子

加藤 紀恵子

遠田 信之

梶谷 久寿美

鎌田 憲子

大潟 廣子

宮城 涼

会のたより

●九月二十日(日)十時、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、社務所二階の杉・檜の間にて十一時から十一時四十五分まで歌会を行いました。

【出席者】村田先生、角田副会長、大瀧、大桃、小川、織田、後藤紀美子、八尾師各会員、事務局の遠田、須田権禰宜、岩間事務員の十一名。

●歌会終了後、十二時十分まで社務所二階の杉・檜の間にて、第九十五回札幌興風会短歌勉強会を行いました。「写真」「写生」というテーマの歌について勉強しました。

【出席者】村田先生、角田副会長、大瀧、大桃、小川、織田、後藤紀美子、八尾師各会員、事務局の遠田、須田権禰宜、岩間事務員の十一名。

(事務局・遠田)

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、毎月二十日の旬祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

毎月二十日の旬祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、

記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ちしております。

一、場所 札幌市中央区宮ヶ丘四七四 北海道神宮社務所

一、開催 毎月二十日

午前十時より旬祭並献詠祭(本殿)

午前十一時より歌会

※正午から三十分勉強会

一、月会費 三千元(うち玉串料千円)

※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。

一、その他

①毎月二十日、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げています。

また、その月に誕生日を迎える方にも別にお祝いの記念品を贈呈しています。

②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集『興風』を発刊致します。

③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。

④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局 TEL〇二一六二一〇二六一 担当 北海道神宮教化部 遠田(とこだ)

令和二年十一月兼題

一、北海道神宮献詠 「見る」

二、札幌興風会兼題 (一)「水」

〃 (二)「椀(碗)」

〃 (三)「雑詠」

※締切り 十月二十五日(日) 必着

三、明治神宮献詠 「旅」

※未発表歌厳守。締切りは毎月十日ですのでご注意ください。所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四・八五〇五

札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内

札幌興風会事務局

電話 〇二一六二一〇二六一

発行人 吉田源彦

編集人 遠田信之

印刷人 白馬堂印刷(株)